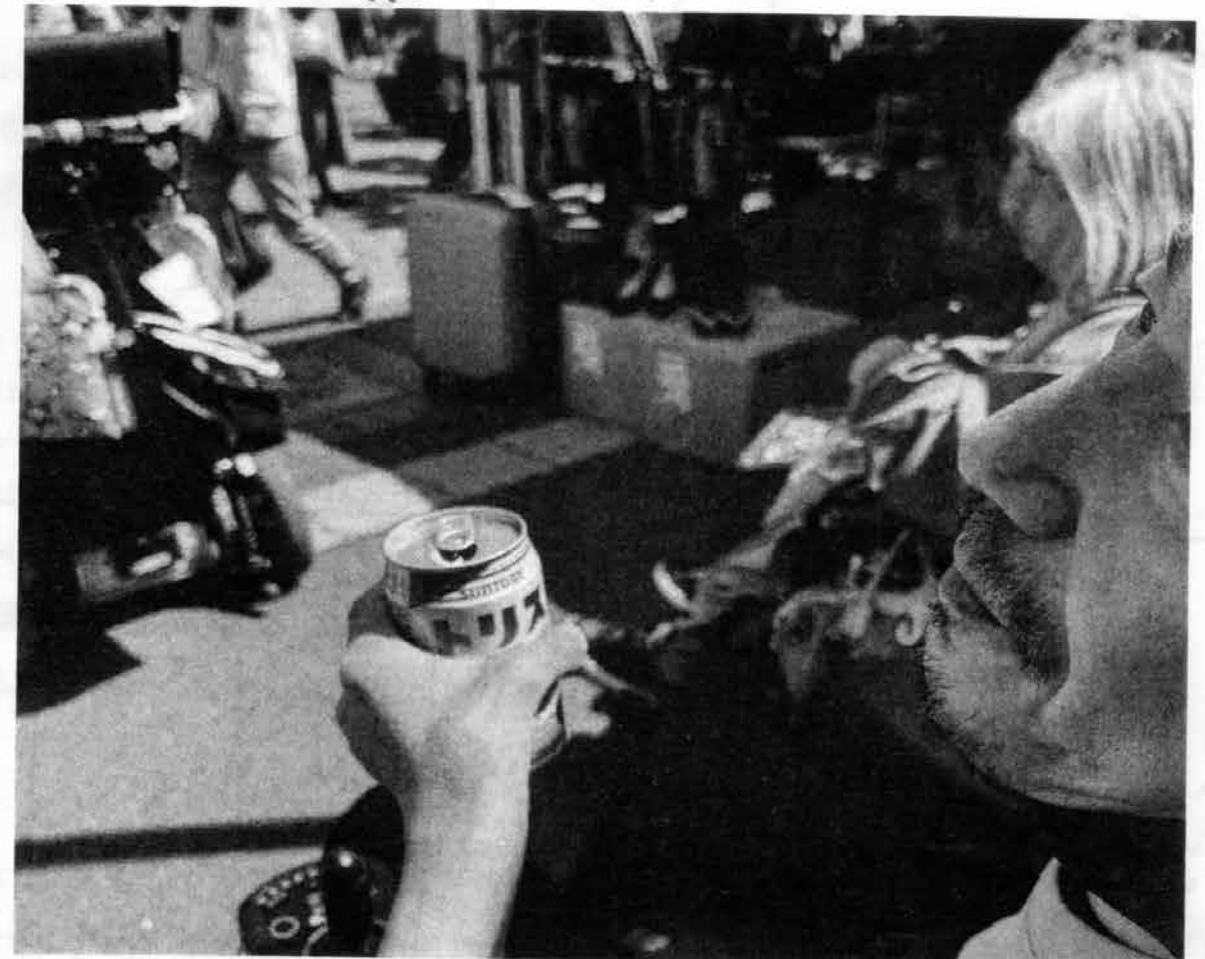


月刊 わらじ 5月号

特集 わすれこた



手前、電動車いすのコントロールネバーを握っていた左手にハイボール缶を握り直して一休みする萩原秀司さんは、地域活動支援センター(サービス向上型)パタパタの利用者。ここは春日部市のふじ通り。全長1.1Kmの藤棚の下で、今日4月27日(日)は第44回春日部藤まつりが開かれた。パタパタでは今年も、連携するべしみ等と、学生や主婦たちボランティアの応援を得て、食べ物、飲み物やかばん他を並べ、朝から夕方まで出店した。交差点に接する角地での出店で周りのスペースがあるため、テントの外に出て休んだり、通りがかりの人々との会話や、かつて関わったことがある人達との再会の日でもあった。

人は人と出会いたい。一緒に生きたい。違いを知りたい。だから人は不安でもある。当然だ。が... 2020年から2022年、コロナ禍の下、藤まつりは中止された。この時期、「一斉休校」や「緊急事態宣言」や「アベノマスク」、「三密」、「ソーシャル・ディスタンス」等、根拠薄弱な国策が、まかり通ってしまった。

コロナが5類になり、2023年からふじ祭りは再開されたが、医療、福祉施設の面会制限は解除されず、GIGAスクール構想は「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化として強化される。どんな障害やちがいがあっても一緒に生きたいという思いや行動が、いつのまにかすめとられ、動員されてはいないか?

二〇二五年五月一日 毎月一回一日発行 通巻五六〇号
一九八四年十月四日 第三種郵便物認可 頒価二〇〇円

小さな新聞 5月号

THE CHISANA SHINBUN
第00504号 (3月10日の会)

祝 小春 5月
祝 小春 5月
祝 小春 5月

新復生社会のほいまん

2023年度から「5歳児健診」の普及に向け自治体への支援が強化される。今までは、3歳児健診の後には就学時健診までの期間が開いていたが、その間を埋めるため、推進することでも家庭庁は、28年度までに全国での100%実施を目指すという。

5歳児健診で行う項目は、(1)身体発育状況 (2)栄養状態 (3)精神発達の状態 (4)言語障害の有無 (5)育児上問題となる事項の確認(生活習慣の自立、社会性の発達、しつけなど)。要するにこの時期は「発達障害」が明らかになる時期と見なされており、早期発見をし、保健・医療・福祉・教育が連携して支援を開始しようという目的。越谷市でも該当する年齢の子全員に

「アンケート」を送付するという。先行的に5歳児健診を行って成果が上がっているという大分県・竹田市が示されている。竹田市は人口2万弱。5歳児健診の受診率は90%を超えている。判定結果(2021、2023年)は異常なしが30%、要指導が13%、要観察が31%、要精密が10%、治療中が16%。

要観察以上が161人。そのうち個別支援や相談をへて就学支援ファイルを作成したのが69人。健診を受けたのが288人だから、5%が要観察で、12.5%が就学支援ファイル(個別の教育支援計画)の授学級・学校への振り分けのファイル)の対象という。この驚くべき高率で「早期発見」した竹田市の例が、うまくいった例として紹介されている。

4月16日の埼玉新聞は埼玉県特別支援教育推進計画(2025、2027年度)について報じている。障害のある子どもとない子どもが共に学ぶことを追求するとともに、連続性のある「多様な学びの場」における教育を推進するという。県東部地域・県南西部に特別支援学校を新設する。「共に」を充実する計画。5歳児健診という形ですべての子どもに「検査」を受けさせ、その結果、一年がかりで、保健・医療・福祉・教育が寄ってたかつて子どもを特別支援学校・特別支援学校に分類処遇するシステムが5歳児健診といえる。果たして子どもは分離されることを望んでいるのだろうか。

◆菅野秀美さんへ春日部市へ休職する人。菅野さんは学生さんで握立大にニューマン。わらじ短信。ふいまつり、春日部

藤ヶ谷郁美さん、橋本

布にパタパタ、ゆらゆら。エ、べしみ協同出展。◆野島久美子さん。25年前の地へ、を記念して集りを、家出同然の二人。